

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

3

2020

特集 酪農経営最前線：NOW



特集

酪農経営最前線：NOW

3 メガロボットファーム化進む北海道酪農

齊藤 裕基

最先端のロボットやICT導入により生産基盤の維持・拡大を続けてきた北海道の酪農。さらなる生乳生産量拡大のためには、輸入乳製品への対抗策が急務である

7 先細りの都府県酪農、復活の糸口とは

細井 洋行

都府県における酪農では、生乳生産量が右肩下りの状況が続いている。その中であって業績を伸ばす湯田牛乳公社の取り組みから、都府県酪農の生き残り策を考える

11 カッコイイ酪農へ、スマート農業の挑戦

菱沼 竜男

次世代閉鎖型搾乳牛舎、ロボット搾乳など最新技術を取り入れることで労働環境を改善しようと実証試験がなされている。従来のイメージを覆す次世代酪農の姿とは

情報戦略レポート

15 耕種・畜産とも売上高は横ばい 収益は費用増で減益

—2018年農業経営動向分析(個人経営)—

経営紹介

経営紹介

23 有限会社アグリプラント／山口県 福永 彰

流行をいち早くキャッチしニッチ野菜を生産、食べ方を発信することで販路を開拓し現在では国内有数の生産量を誇る。成功の秘訣は需要に必ず応えることだと語る

変革は人にあり

27 株式会社アジチファーム／福井県 伊藤 武範

情報コンサル出身者が農業生産法人を継承した。駐越経験を活かし、日本でベトナム米、ベトナムで日本米を栽培する事業に取り組み拡大を続ける。

4月号予告

特集は、「食品ロス削減の潮流から学ぶ～SDGsシリーズ～」を予定。SDGsと農林水産業・食品産業とのかわり合い、中でも2030年度に2000年度の半減を目標とする食品廃棄物(食品ロス)問題について、諸外国における取り組み事例から国内での取り組みの在り方について考察する。



撮影：北條 純之
長野県松本市
2013年3月撮影

ゴボウの芽

■名残の雪から顔をのぞかせているのは、ゴボウの芽。信州の長い冬も終わり。音のない風景の中、命の活動は始まっている■

シリーズ・その他

観天望気

家族酪農の発信力 鴫川 洋樹 2

農と食の邂逅

丸尾 美香／兵庫県
青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

フォーラムエッセイ

忘れられない牛乳の味 草刈 正雄 22

主張・多論百出

株式会社ファームステッド代表取締役
長岡 淳一 25

耳よりな話 215回

技術革新著しい搾乳機械 加茂 幹男 30

まちづくりむらづくり

中学生が地域おこしに会社を設立
目標は100年スパンのまちづくり
株式会社氷川のぎろっちょ／熊日宮原販売センター
熊本県八代郡氷川町 岩本 剛 31

書評

丸山 俊一+NHK「欲望の時代の哲学」制作班 著
『マルクス・ガブリエル 欲望の時代を哲学する』
宇根 豊 34

インフォメーション

千葉ジェッツに学ぶ経営を強くするノウハウ
千葉支店 35

林業の専門家が語る里山や木材利用の可能性
近畿地区総括課 35

異業種からの農業参入を実例から学ぶ
富山支店 35

雇用問題や地域課題に農業経営が貢献できること
北見支店 35

資金紹介 36

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第15回アグリフードEXPO東京2020 38

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。

望天 観気

家族酪農の発信力

わが国の主要な農産物の中で消費量が増加基調なものとして、小麦や肉類、牛乳・乳製品が挙げられるが、そのうち牛乳・乳製品は国内生産量が減少し、輸入量が増加している。

国内の生乳生産量は一九九六年以降、一貫して減少し、二〇一八年はピーク時に比べ一六%少ないが、この間、北海道では二二%増、都府県では三五%減と、対照的な推移をたどった。同時期に、都府県では酪農メガファームと呼ばれる大規模経営が生まれ、地域によっては過半のシェアを占めるほどになっているが、生産縮小を止めることはできなかった。このまま都府県の家族経営は消滅し、わが国の酪農は北海道と都府県のメガファームだけになってしまうのだろうか。あるいは、都府県の家族経営の動向は、北海道とメガファームの行く末を暗示しているのか。

はつきりしているのは、都府県の家族経営がポイントになっていることである。最近になって、都府県酪農を念頭に置いた行政施策が策定され、それ自体は歓迎すべきことであるが、重要なのは都府県酪農のメリットを活かしたビジネスモデルを描くことである。

例えば、一九九一年二月の第七一回日本酪農研究会で発表した有限会社石田牧場(神奈川県伊勢原市)は、住宅が隣接する立地条件を活かし、「一人でも多くの人と交流し酪農について発信すること」を理念とする。そのために農場HACCP認証を取得して経営成績の改善につなげ、六次産業化にも取り組む。つまり、自社乳製品の安全・安心を消費者に直接伝えられる最大のメリットをHACCP認証により検証するとともに、経済性に結び付けているのだ。

国産乳製品の安全・安心は、今後も増加する輸入乳製品に対抗するための重要な切り札である。その立役者となり得る酪農・乳業団体には、安全・安心をイメージでアピールするのではなく、検証可能な制度として構築し、すべての日本酪農を包摂するような取り組みが求められる。



秋田県立大学生物資源科学部教授

鷓川 洋樹

うかわ ひろき

1956年生まれ。北海道大学農学部卒。博士(農学)。農林省草地試験場、農林水産省農業研究センターなどを経て、2009年から現職。専門は農業経営学。主な著書に『北海道酪農の経営展開』(農林統計協会)、『転換期の水田農業』(共編著・農林統計協会)など。

牛の世話はできなくとも
できることがあるはず
牧場に嫁ぎ、自家製で
ジェラートショップ開店
酪農家の想いを伝えたい

農と食
の邂逅

丸尾 美香 さん

兵庫県赤穂市
株式会社丸尾牧場

生産だけでなく加工、販売までおこなう農業
の六次産業化が一九九〇年代に提唱され、農
家女性の場が広がった。将来、牧場を手伝って
と、非農家育ちで四人の子育て。いま、自家製
の生乳のジェラートで農業を表現する。





P19: 早朝の丸尾牧場。牛がストレスなく、食べたい時にいつでも餌が食べられるよう「居心地、寝心地、食べ心地」に気を配っている P20: 丸尾家の皆さん。約50haの農地で自給飼料も作る(右上)「牛が鳴くのは何か不満があるから。鳴かないように育てる」が丸尾流飼育方法(右下右)。TETEスタッフの自由起さん、松原渚さんと(右下左) 常時16種類のジェラートが楽しめる(左)

牛を愛する家族に囲まれて

酪農家が営むジェラートショップはあまたある。開店のきっかけはさまざまだが、酪農家の想いは訪れる人に届く――丸尾美香さん(三三六歳)に出会って痛感した。

夫の建治さん(三三六歳)に出会うまで、美香さんにとって酪農は未知の世界だった。美香さんは子どもの頃から憧れていた美容師となり、仕事に没頭していた。建治さんは丸尾牧場の三代目として、両親とともに三八頭の牛を飼っていた。共通の友人を介して知り合った二人。互いに少ない休みをやりくりし、スノーボードを楽しんだ。

美香さんは建治さんから「将来は牧場の仕事を手伝ってほしい」と言われた。「お義母さん(祐子さん)が、お義父さん(建城さん)を支える姿を見て育ったから当然のこと。牛を育てるのは魅力的な仕事だと思いました」。結婚して間もなく、酪農家のジェラートショップを見学した。「牧場といえば北海道のイメージしがなく、酪農家が家族で営むジェラートショップがあることも知らなかったです。こういう形があるのかと印象に残りました」

その後、長女の葉愛さん(二二歳)を筆頭に、四人の子どもに恵まれた。折しも、丸尾牧場は二〇頭へと増頭し、法人化も果たした。従業員も雇い、美香さんは時折事務作業を手伝う程度だった。「おかげで一〇年間、がっつり子育てさせてもらいました」と

ほほ笑む。

それでも、傍らで家族の仕事ぶりをしっかり見ていた。「いい牛を育てたいという純粹な想いが伝わってきました。台風の日、風雨でびしょびしょになりながら懸命に牛の世話をする姿。人との付き合いを大切にすお義父さんは、役も積極的に引き受けているのです」。こう話す美香さんから、家族を敬う想いが伝わってくる。

家族の仕事ぶりは対外的にも認められている。生乳の品質、畜舎環境などを総合的に評価し、優れた牧場に贈られる「ハイクオリティミルクアワード」を丸尾牧場は二〇一二年以来、六回受賞した。

牧場の良さを知ってほしい

そんなとき、ごく少数ながらも臭いなどを理由とする牧場に対する否定的意見を耳にした。家族の働きぶりに全幅の信頼を置いていた美香さんの心は奮い立った。

「子どもたちに、酪農という仕事への誇りを迷わず持つてもらいたいと思いました」

子どもたちは日頃から、学校給食で出る牛乳を「パパの牛乳だ」とうれしそうに飲んでいました。丸尾牧場を含む近畿域内の牧場で搾った牛乳が給食時に提供されることを既に知っていたのだ。「ただ、もつとダイレクトに、パパたちの牛乳はこうやって使われていると知ってもらいたい。牧場のいいところを知ってほしい」と美香さんは思った。結婚当初、見学したジェラートショップにヒ



美香さんは兵庫県たつの市出身。店名は「手と手をつないでいるんな人に来てもらえたら」という想いからTETEと付けた(上) 建城さん、祐子さんと(下)

ントがあるのではないか。「牛の世話はできなくても、嫁いできた自分だからできることがあるはず」——。美香さんは三年前、ジェラートショップの開店を決意した。

ジェラートの作り方、ショップの運営方法など一から学んだ。農業改良普及員が親身になって相談に乗ってくれ、近県のジェ

ラートショップの視察を重ね、ジェラート製造機メーカー主催の研修会を受講するため東京にも行った。兵庫県が主催し、農業経営を学ぶ「ひょうご農業MBA塾」で経営の厳しさも知った。勉強や準備に追われる美香さんのために、家族はもちろん、実母の高嶺和子さんも、子どもたちの面倒を見て

くれた。

ジェラートショップは、粗飼料である牧草を保管していた場所に建てることにした。農用地区内に農家レストランを開設できる国家戦略特区制度を活用したのだ。赤穂港のそばで、近くに観光施設があるわけでもない。「ここにお客さんは来ないよ」と周囲から散々言われた。だが、そのような場所だからこそ勝算があると、美香さんは確信していた。視察したジェラートショップの先々で、「ショップを目当てに来てくれるお客さまも多い。駐車スペースは十分確保した方がいい」という話を聞いていたのだ。住宅街や繁華街ではその確保が難しい。

そして、ジェラートのおいしさや食べてもらう環境に心を配った。子どもたちが遊べるキッズスペースは、美香さんのこだわりの一つだ。子どもたちが楽しく遊ぶ様子をガラス越しに見ながら、ママたちにゆっくりとジェラートを味わってもらいたい、という想いから設置した。

メニューにも工夫が凝らされている。建治さんに相談し、濃厚なジェラートを提供するため牧場でジャージー牛を飼育することにした。「ジャージーとホルスタインの両方のジェラートが食べられるお店は珍しいと思います」と美香さん。「自分の子どものためと思って決心しましたが、やる限りはお客さまにいかにも満足してもらおうかという視点を外すことはできません」と話す美香さんに「たくましいよね」と目を細める建治

さん。「ジャージー牛の導入はこの人の想いそのもの」と美香さんを見て言う。

周囲の支えがあつてこそ

昨年五月一日、ジェラートショップ「TETE」はオープンした。「周りの人たちの支えがあつて開店できました」と美香さんは何度も繰り返し話す。力を貸してくれた人々への感謝を伝えようと、四月にプレオープンイベントを開いた。無料でジェラートを提供したこともあり、三日間で一二〇〇人が来場した。驚くべきはグラントオープンしてからの客足の伸びだ。赤穂市は、同時期にTETEを含め三店舗が開店するなどジェラートの激戦区となったが、TETEには半年で一万二〇〇〇人以上が訪れた。開店五年後に想定していた客数だ。ジェラートの味のおいしさ、子育てママへの配慮などに込めた「牧場の良さを伝える」という美香さんやスタッフの想いが、訪れる人に通じているからこそだろう。

私は四人の子どもたちに「将来、誰がジェラートショップをやる？」と聞いた。唐突な問いにもかかわらず、全員が、まんざらでもない表情をこちらに向けてくれた。「牧場の方もやってもらわんと」と、美香さんもうれしそうな表情。TETEは単なるジェラートショップではない。美香さんたち家族の酪農に対する誇りと愛情がたっぷり詰まった、集大成なのだ。

(青山浩子／文 河野千年／撮影)



二年程前になりますが、六月から真冬の二月にかけて長期滞在も含めて六回ほど、北海道の十勝に足を運びました。朝の連続テレビ小説『なつぞら』の撮影のためです。

北海道酪農開拓者を演じたわけですが、搾乳シーンは難しかったです。克蘭クイン前に北海道に入り、酪農家からやり方を教えていただき猛特訓したものの、僕が搾るとバケツに入らず、あっちこちに飛んでつてしまふ。結局最後までうまく搾ることはできませんでした。四苦八苦する僕とは対照的に女性陣はうまかった。搾乳にはきつと、センスが必要なんでしょう(笑)。ロケでは、多くの差し入れをいただきました(これが僕の大きな楽しみの一つ)。酪農家からは搾りたての牛乳、ヨーグルトなどをいただき、おいしさはどれも格別でした。婦人会でも豚汁を作ってくれ、小学校の子どもたちがジャガイモのミルクスープを届けてくれました。極寒の中でいただきましたが、体だけでなく心も温まりましたね。北海道の農産物を堪能し、より一層北海道が好きになりました。

牧場の作業の合間に撮影したこともあり、待ち時間中はずっと酪農家の仕事を見ていました。毎日、早朝から始まる、餌やり、牛舎の掃除、搾乳――。普段の優しく柔らかな顔つきが一変し、気迫がすごく、気軽に話しかけられる雰囲気じゃない。それで僕は、酪農家というのは牛に誇りを持つ職人だと感じています。

明治から始まった北海道開拓。開拓の祖、依田勉三氏のドキュメンタリー・フィルムを偶然見ましたが、原野を起こして未開の地を切り開いていく苦労は相当なものです。挫折してクニに帰る人もとても多かったと聞きます。それでも困難を乗り越え北海道の基盤をつくった人たちがいる。北海道の酪農家にはそんな開拓者たちの強い精神が受け継がれているのでしょう。

北海道をはじめとする全国の酪農家のおかげで僕たちはおいしい牛乳が飲める。豊かな食を支えていただいていることに、改めて感謝をしたいと思います。(談)

F



俳優
草刈 正雄

くさかり まさお
1952年生まれ。福岡県出身。二枚目からコミカルな役柄まで幅広い演技力でこなし、実力派として知られる。2016年NHK大河ドラマ『真田丸』、連続テレビ小説『なつぞら』での名演が話題になる。NHK BSプレミアム『美の壺』の案内人を務めている。3月15日(日)夜10時より主演ドラマ『連続ドラマW オペレーションZ〜日本破滅、待ったなし〜』(WOWOWプライム)が放映される。

忘れられない牛乳の味

株式会社ファームステッド代表取締役
クリエイティブディレクター

長岡 淳一



●ながおかしゅんいち●
一九七六年北海道生まれ。専修大学経済学部卒。一〇一三年株式会社ファームステッドを設立。「地方こそデザインを」をコンセプトとし、デザインで農業と地域を発信するモデルを作る。現在は日本全国からの依頼を受け、農業や地域のブランディングやプロデュース、講演活動など、多岐にわたって活躍中。グッドデザイン賞受賞など受賞歴多数。一九年飲食店「ファームステッドテール」を立ち上げた。著書に『農と食と地域をデザインする』（新泉社）など。

日

本の第一次産業や地域の現場はいま、深刻な問題に直面しています。デザインやブランディングの仕事のために全国の地方を訪れると、「農」や「食」「地域」に関わる生産者からの悲鳴にも似た声を耳にします。「地域の高齢化が進み、後継者不足によって農業人口が激減している」「商品の差別化がしづらく、価格競争に巻き込まれて疲弊している」「海外から安価な作物が輸入され、どう対応すればよいのか分からない」

こうした声によく触れると、この国の第一次産業に未来はあるのかと、暗たんとした気持ちになります。地方の経済を支える第一次産業が疲弊すると地域社会の発展は難しい。何よりも「農」や「食」は人間の「いのち」に関わる仕事であり、それを守るために自分たちができることを考えています。

デザインとは、ただ単にキレイでおしゃれなものを作ることはありません。もったいぶった格好良いものを作ることもありません。モノ作りの人が

考えていることをカタチにして、表現すること。つまり「伝えること」がデザインだと言えます。

よく聞かれることがあります。それは「デザインすると売れるんですか？ どれくらい売り上げがアップするのですか？」というものです。

デザインによって売り上げが伸びるかどうかが、その相関関係を証明するのはとても難しいことです。そもそも売り上げというのはマーケティングや広告、価格設定、店頭での販売方法などいろいろな要素が関連しているものだからです。

僕たちは依頼主である生産者、地域の皆さんの要望をじっくり聞くことから始めます。なぜロゴマークが必要なのか、どうして他と差別化できるようなブランドの仕組みが必要なのかを一緒に考えます。そして、依頼主の考えていることを正確に理解するために、必ず仕事場である農場や農地を訪ねることになっています。カラッとすると雨の少ない地域だったり、山から吹き下ろす風がとても冷たかったり、畑の

土が水分を含んでいて、手に取るとひんやりして気持ち良く感じたりする。こうした体験も、デザインやブランディングの仕事には大事だと考えているのです。

デザイン

デザインの提供は単なるスタート地点であり、そこからの波及効果は無限大です。消費者に思いを伝えられると同時に、伝える側、つまり農家や生産者の気持ちにも変化が生まれるのです。

新しいロゴマークを目の前にして、生産者の顔がキラキラ輝く瞬間を、僕たちは何度も体験しました。今っぽい表現をするなら「やる気スイッチが入った」とも言えるでしょう。本当に小さな一歩ですが、とても重要で大きな意味を持っています。大げさに言えば、デザインは人の潜在能力を引き出し、思想や行動も変えていくパワーを持っているのです。

どんな作物をどんな思いで作っているのか、生産者の側からもっと発信してもいいですよ。気候や風土、小さい実が大きくなって収穫に至るまでの様子、生産者ならではの工夫やこだわり。それらはきっと、食に対して感度の高い消費者も知りたいことなのです。同じように見える農作物は、他の農場のもの

と何が違うのか。個性や独自性をアピールして、作り手の顔が見える農業をやっても良いのではないのでしょうか。

そして自分たちは何をめざしているのか、得意分野、自信を持って提供できるものは何なのか。目に見えるクリアな形としてロゴマークを作るときに、そこをちゃんと考え直す。

さらにロゴマークに込められた思いを組織の全員が共有するというプロセスは、会社でも農場でも大切です。自分は何者なのかという意識を最高に高めて働く。ロゴマークの一番の効果は、実はそこにあると考えています。

現在のようにネットや物流が発達しても、地方には「知られていない」「素晴らしい生産者や産品が多く眠っています。実際に日本中を訪れて、そのことを痛感しました。農業の分野にデザインを取り入れることは、地方の魅力を再発見して発信し、地域を活性化することにつながっていくと信じています。

日本の農業を、そして第一次産業をデザインで変える！ それくらい強い意志を胸に抱きながら、僕たちの農場通いは続きます。

F

生産者のやる気スイッチを入れる その力こそ「農」のデザインの本骨頂

技術革新著しい搾乳機械

日本政策金融公庫
テクニカルアドバイザー

加茂 幹男

本で本格的に乳牛が飼養され、牛乳を含めた乳製品が庶民に食されるようになったのは、明治・大正時代からです。当時の農家は稲作を中心とした耕種農業に携わることがほとんどで、排せつ物を堆肥として利用する目的で、一〜二頭の乳牛を飼養するのが一般的でした。

この頃は手で搾乳し、バケツにためてブリキの輸送缶に詰め、冷水で冷やして保存した牛乳を販売するのが一般的でしたが、一九五三年、日本政府は国内の酪農を促進するために「有畜農家創設特別措置法」を制定しました。これを契機に乳牛が積極的に輸入されるようになり、酪農の専門化と規模拡大が推進されて日本の酪農は機械化が進み、その姿を変えていきました。

まず、五〇年代後半ごろに「バケツミルカー」の普及が始まりました。バケツミルカーとは、真空の力を利用して搾乳する持ち運び可能なバケツ型の装置です。牛の乳頭にセットする搾乳ユニットや真空パイプ、真空ポンプなど、いくつかの部品から構成され、搾った乳は搾乳管（バケツ）に直接集められます。搾乳にかかる時間と労力は大幅に軽減され、酪農家の働き方は大きく変化しました。

六〇年代に入ると、バケツミルカーよりさらに省力化され、生乳を牛乳処理室に直接



つなぎ飼い牛舎で飼養する経営体ではパイプラインミルカーが主流で、72.4%が導入

送れる「パイプラインミルカー」が各地で導入されました。

パイプラインミルカーは生乳を搾る搾乳ユニット、搾乳に必要な圧力を作る真空ポンプ、それを調節する調圧器、生乳を送るパイプなどから構成される搾乳機械・施設です。乳牛が四六時中つなぎ飼いされている牛舎に設置され、搾った生乳はパイプを通して冷却機能のついた貯蔵タンク（バルククーラー）に直送されるところがバケツミルカーから進化した点です。

さらに八〇年代後半には、乳牛九〇頭以上の大規模酪農家を中心に、「フリーストール牛舎」と「ミルキングパーラー」が普及しました。

フリーストール牛舎とは、それまでのつなぎ飼い牛舎と異なり、牛をつながず自由に歩かせるタイプの牛舎です。搾乳時間になると、牛が搾乳専用施設であるミルキングパーラーに誘導され、八〜一二頭を一度に搾乳できます。順番が終わると牛は自分で退出する仕組みで、搾乳にかかる人手と時間を大幅に省略できるのが利点です。

二〇〇〇年代に入ると、「ロボット搾乳」や「搾乳ユニット搬送装置（キャリロボ）」など、ICT等の先端技術を活用した搾乳機械・施設が一部の酪農家に導入され、搾乳の自動化・無人化が進んでいます。

F



Profile

かも みきお
1950年北海道生まれ。岩手大学農業機械学科卒業後、農林省東北農業試験場入省。農林水産技術会議事務局、(独)農研機構近畿中国四国農業研究センター四国農業研究監、(独)農研機構畜産草地研究所草地研究監などを経て、2010年から日本政策金融公庫に勤務。専門は畜産草地で、主な研究対象は飼料の収穫・調製・給与など。

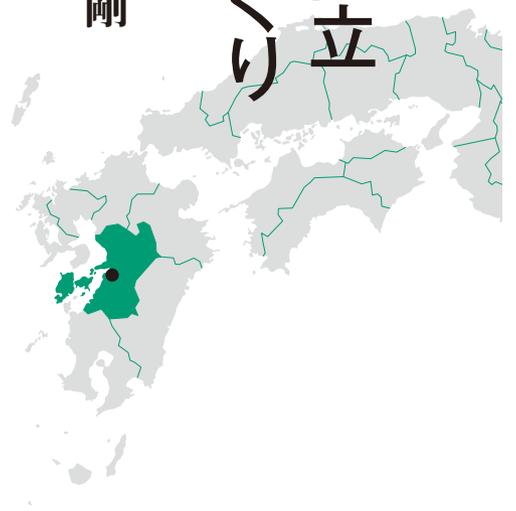


中学生が地域おごしに会社を設立 目標は二〇〇年スパンのまちづくり

熊本県八代郡氷川町

株式会社氷川のぎろちよ事務局長
熊日宮原販売センター

岩本剛



役目は次代を担う人材育成

氷川町は熊本県の中央部に位置し、二〇〇五年一〇月、旧宮原町と旧竜北町が合併した人口約一万二〇〇〇人の町である。町の中央部を清流・氷川が流れる。基幹産業は農業であるが、就農人口は年々減少し耕作放棄地は増加の一途をたどっている。

そんな小さな田舎町で最近話題を集めているのが、一八年二月、女子中学生五人が耕作放棄地の解消を目的に設立した「株式会社氷川のぎろちよ」である。全国から取材や問い合わせが相次いでいる。昨年一月には、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局および、内閣府地方創生推進事務局主催の「SDGsまちづくりアイデアコンテスト」において、最優秀賞を受賞している。プロジェクト名は「新・ムーブメント伝説」月夜の農業は、ワクワク感がたまらないよ〜だ。

これは耕作放棄地を解消するために「夜の農作業」への参加を募るもので、今年三月に公募による親子連れなどで「月夜の農業クラブ」を立ち上げ、四月から満月を含む一週間の夜に農作業に取り組み予定だ。

実はこの子どもたち、新聞販売店の熊日宮原販売センター（以下、販売センター）で私が設立した「子ども記者クラブ まちの課題解決・探究コース」のメンバーである。私は、子どもの成長に合わせたプログラムを展開しながら、地域活性化を目指している。なぜ子どもの人材育成を目指すのか。それは私が役場職員であった一九九四年、一〇〇年（三世代）スパンでまちづくりに取り組みすることを人生の目標に掲げ、第一世代である私の役目は次代を担う人材の育成だ、と決意したからだ。

明確な目標が定まると、仕事はあくまでも手段であると認識し始めた。企画部署で各種まちづくりに一〇年間没頭するも、合併から三年半

後の二〇〇九年に氷川町役場を早期退職。長野県小布施町の一般財団法人小布施町振興公社において営業部長の傍ら、大学生の受け入れと子どもの人材育成に携わった。しかし、熊本日日新聞社より新聞販売店でのまちづくりへの取り組みを期待され、苦渋の決断で退職。一〇年一〇月、販売センターの代表に就任した。なお昨年三月、ぎろちよの取り組み支援と妻の実家の果樹園支援のため代表を辞任し、現在は、配達とミニコミ紙、子どもの人材育成を担当している。

就任当初、全国のまちづくりの仲間たちから「まちづくりを諦めたのか」「なぜ新聞販売店の店主なのか」と疑問に思われることも多かったが、その理由は三つあった。一つ目は、みずから発信したい情報を独自のメディアであるミニコミ紙に掲載し、新聞に折り込んで顧客に配達できること。二つ目は、学習指導要領の改訂に伴うNIE (Newspaper in Education : 教育に新聞を) の推進により、学校や子どもとかわり、子

profile

岩本 剛 いわもと つよし

1962年熊本県氷川町生まれ。旧宮原町職員時代、まちづくり情報銀行を設立し、住民総参加の総合振興計画や里山における環境学習ほか多数の主要プロジェクトを担当。2008年に氷川町役場を早期退職後、長野県小布施町振興公社営業部長に就任。10年熊日宮原販売センター代表に就任。現在は果樹農家。株式会社梵まちづくり研究所取締役、全国大学生政策アカデミー実行委員長などを務めている。

株式会社 氷川のぎろっちょ

2018年熊日宮原販売センターが主宰する「まちの課題解決・探究コース」1期生の子中学生5人が、耕作放棄地の解消を目的に設立。草刈り部、農業部、ひとつくり部、ものづくり部、地域づくり部、広報部からなり、社員は小学4年生から高校生までの20人。全国から取材が相次ぎ、その活動は21年度の公民(中学校)や22年度の公共(高校)の教科書に掲載が予定されている。

子ども記者クラブの刺激的な活動

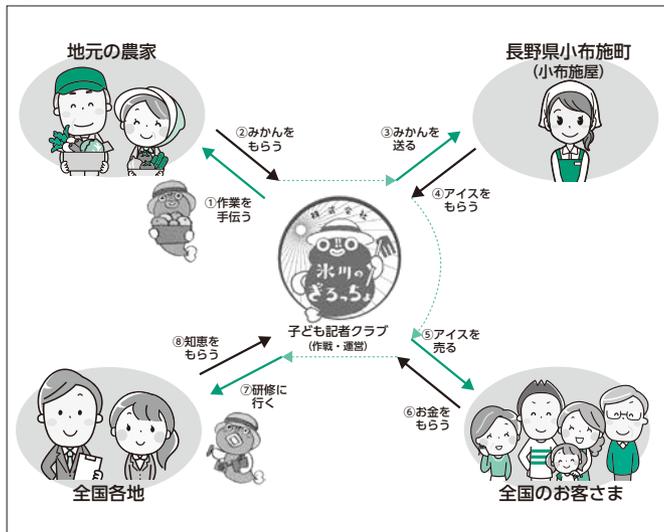
代表就任当時、担当エリアの約四四〇〇世帯に対し、二三〇〇世帯超の顧客があった。その半数以上は旧宮原町以外の顧客であり、地理的にも疎かった。そこで、お客さまに愛される店づくり、地域活性化へ向けた事業の実施、大学生や子どもたちの人材育成、学校との連携、ミニコミ

紙などによる地域情報の発信、各種住民活動の支援の六点を販売センターの目標に掲げた。就任から五カ月後、地域を愛する心を育む、職業観の育成(キャリア教育の推進)、ミニコミ紙による情報発信を目的として、「子ども記者クラブ」を発足した。対象者は新聞購読の有無にかかわらず、エリア内の小三から高三までで、任期は一年。発足時に一八人だった子ども記者は、四年目から六〇人を超える大所帯に成長した。成長の要因としては、女性スタッフのきめ細やかなサポートや保護者との連携を密にしたことに加え、以下のようなプログラムを年二〇日ほど実施し、ミニコミ紙への寄稿も含め活動をポイント化することで、活発な子ども記者を毎年表彰していたことが挙げられる。



ハウス内で「新・ムーンライト伝説」の打ち合わせ

図 わらしべアイスプロジェクト



◇学習系 記事・作文・小論文、スピーチ、農作業、対面販売、わらしべアイスプロジェクト(図)など。
◇食育系 料理持ち寄り新年会、お菓子の家、クッキー、パン、 피자作り、イチゴ狩りなど。
◇交流系 大学生と夏休みの宿題お助け塾、交流会、ガキ大将養成講座など。大学教授と県外研修、交流会など。

さらに五年目からは、県外研修を「東北の被災地取材」から「関西の大学訪問」へ転換した。理由は、二〇二〇年度の大学入試改革へのしなやかな対応と、より高度な人材を育成するためである。同志社大学や龍谷大学など三つの大学を訪問し、大学の授業や教授らの研究、さらに毎年夏に訪れる大学生のゼミ活動を学んだ。遠い関西の地で地域の活性化などの取り組みを知

った子どもたちは、以前にも増して地元について関心を示し始めた。

そしてその翌年、かねてより目指していた「まちの課題解決・探究コース」を立ち上げた。一期生として手を挙げたのは小五から中一の女子六人で、中学生を除き県外研修の参加者であった。同コースの目的を「不透明な時代を生き抜く力を育む」とし、「地域を見て、多様な視点から発見する力」「自ら進んで考え、仲間と議論する力」「企画立案し、課題を解決する力」「活動を振り返り、さらに行動する力と見切る力」「学びを通して、人や地域に希望や元気を与える力」という五つの力の醸成を掲げた。

有料の塾で市場を創出

このコースの特徴は、毎月活動費として五〇〇〇円を徴収し、毎週一回二時間の定例学習会と、月に一度の保護者報告会を開くことだ。知人からは「田舎で有料の人材育成を行うことが成り立つのか」と驚かれたが、有料にすることで今後同業の出現を促したのである。先行き不透明な時代に、行政の施策や学校教育の充実などを待っている余裕は無い。AIの進化も追い風と捉え、人材育成塾の供給が増えれば、需要が掘り起こされるだろう。必然的に私のプログラムのレベルアップが求められるが、供給側の相乗効果により人材育成の市場を創り出したいのである。

さて、一期生は二回のまち歩きと課題の絞り込みなどを経てテーマを「耕作放棄地」に決定した。また実施主体については、彼女たちの覚悟と

社会的責任を果たすべく、中学生ながら株式会社を設立することを決めた。もちろん、私はそれが大変なことであることを何度も伝えたのだが、初志を貫徹することを予感していた。今どきの女子は愛嬌も度胸も兼ね備えているのだ。そして一年後、会社設立と運営の資金をクラウドファンディングで募集し、地元住民からの金額を含め一六二人から二三〇万円の寄付が集まった。設立後の動きについては、紙面の都合上、ざろつちよのホームページをご覧いただきたいが、一年目は三人が高校受験ということもあり、地元には無い農産物の実験栽培や学習会、かんきつ類の販売やイベントの開催にとどまった。そして二年目の今年度は、約六反の耕作放棄地で黒豆や小豆、スダチやエリアンサスなどの栽培を行ったが、草の撤去にてこずり、種まき後に豪雨による水没を経験。長雨もあって、思うような収穫を得られなかった。これはサポートをする私の責任によるところも大きく、新聞店代表を辞任した直後で慌ただしかったこと、また妻の実家の果樹園の手伝いがあった。さらに土日に雨やメディアの取材が集中したことで、思うような農作業ができなかったことも挙げられる。これらを踏まえ、新年度は「月夜の農業クラブ」による取り組みに加え、大人のサポーターを増やしていきたいと考えているところである。

一方で、彼女たちの成長は著しい。コミュニケーション力や企画力が増したことで自信を付け、社会の一員として積極的に取り組む姿勢には頭が下がる思いである。保護者からのコメントは身内ゆえ辛口なこともあるが、家庭内でもまち

づくりに関する会話が增えているようだ。また、社員は、昨年九月より二市一町の小四から高二までの二〇人となった。後輩の二〜四期生の活動テーマは違うものの、サポートをしている彼女たちは後輩にとって憧れの的である。彼女たちはサポートによる連携を深め、後輩たちの育成も目指している。

虹を懸け続ける存在でありたい

冒頭、「二〇〇年スパンでまちづくりに取り組む」ことを人生の目標に掲げていると紹介したが、現在、私は水川町と水川流域の二〇年後を次のようにイメージしている。一つ目が、子育て環境（自然、人、地域、教育機関）が充実し、コンパクトな町が形成されていること。二つ目が、全国の高等教育機関や地域・団体との連携により、刺激的な交流があること。三つ目が、複数の産業や生業が共存することで雇用場があり、多様な豊かさを実感できることだ。今後も大学との連携や大学生のまちづくり参加、子育て環境の充実を図れば、アカデミックな水川流域としての知的好奇心をそそる地域の実現が期待できる。実現に向けて取り組んでいくつもりだ。

数年後、現在学んでいる子どもたちの多くは町を出て、新たな学びに励んでいることだろう。一方、私はもうすぐ還暦を迎えるが、後輩たちの育成と雇用の創出などにも力を注ぎたい。刺激的な活動をする一方で、子どもたちに虹を懸け続ける存在でありたい。そして、いつか子どもたちがその虹を駆けて来て、私の後に続いてくれることを願っている。

『マルクス・ガブリエル 欲望の時代を哲学する』

丸山俊一・NHK「欲望の時代の哲学」制作班 著



(NHK出版新書・820円 税抜)

時代と切り結ぶ哲学もある

宇根豊

(百姓・思想家)

スケボーに乗って颯爽とテレビに現れたこの若いドイツの哲学者の姿を目にした人もいるだろう。私もまさか彼の提唱する哲学が、こんな現実を見事に切開してくれるとは思いませんでした。主な理由は二つある。

かつて日本人は、ネイチャーの意味である「自然」という言葉を持たなかった。それは明治二〇年代にやっと日本語(翻訳語)となった。かつての日本人には、山や川や生き物は存在したが、自然は存在しなかった。なぜなら先祖は自然の一員として生きていたから、自然を外から見るとまなざしを持たなかったからだ。

この問題を「世界」全体に広げて、すべてのもは存在するが(竜などの動物も認識上は存在するが)、「世界」だけは存在しない、と主張するのがマルクス・ガブリエルだ。

二つ目は従来の学(農学も科学も)は観察者(行為者)がいてもいなくても関係なく、現実が存在するとする。ところがポストモダンの思想は逆に、現実を観察者次第でどうにでもなるもので、イメージ(思考)だけが存在するとした。

二九歳でドイツのボン大学の教授に着任したガブリエルは、どちらも間違っていると言う。その結果どうなるか。私たち百姓の見解も、学者の見解も同列・同等になるのである。この哲学を「新しい実在論」と呼ぶ。

例えば、蛙が目の前に飛び出してきたとしても、科学は光(電磁波)が目に入り、電気信号に変わり、脳の中に視覚像を結び蛙が見えると説明する。この説明では、蛙は脳の中に存在することになる。こうした科学的な説明に私たちは慣れてくると、自分の直観や観察を劣つたものとみるようになるが、そうではないのだ。

本書の三分の一を占める彼の「戦後哲学史」講座も必読だ。これほど哲学が現実と深い関係にあったなんて、ほんとうに驚いた。一例を挙げるなら、現在の資本主義をけん引した新自由主義は、実は世界はイメージの投影だとしたポストモダンの哲学を、経済概念に移し替えたのだそう。彼らの方が哲学をうまく利用して、反対派は不勉強だったということになる。

この本はNHK番組の書籍版であるが、実に丹念にガブリエルの言葉を拾っている。彼自身の哲学一般書「なぜ世界は存在しないのか」(講談社選書メチエ)もぜひ読んでほしい。

読まれています 三省堂書店農林水産省売店(2020年1月1日~1月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 逆転の農業 技術・農地・人の三重苦を超える	吉田 忠則/著	日本経済新聞出版社	1,800円
2 農政改革 行政官の仕事と責任	奥原 正明/著	日本経済新聞出版社	1,600円
3 絶望の林業	田中 淳夫/著	新泉社	2,200円
4 最新版 図解 知識ゼロからの現代農業入門	八木 宏典/監修	家の光協会	1,300円
5 最新版 図解 知識ゼロからのコメ入門	八木 宏典/監修	家の光協会	1,500円
6 Q&Aでよくわかる 知識ゼロからの農産加工入門	尾崎 正利/著	家の光協会	2,000円
7 OECD政策レビュー・日本農業のイノベーション	OECD/編著	大成出版社	3,000円
8 アグリカルチャー4.0の時代 農村DX革命	三輪 泰史、井熊 均、木通 秀樹/著	日刊工業新聞社	2,300円
9 誰も農業を知らない プロ農家だからわかる日本農業の未来	有坪 民雄/著	原書房	1,800円
10 農と食と地域をデザインする——旗を立てる生産者たちの声	長岡 淳一・阿部 岳/著	新泉社	2,200円

交流会 千葉ジエツツに学ぶ
経営を強くするノウハウ

千葉県農業協会との共催でお客様交流会を開催。株式会社千葉ジエツツふなばしの島田慎二会長が、従業員やる気を引き出すマネジメント術やビジョンを共有することの重要性について、自身の経験を交えて語りました。参加者からは「自分の経営を見つめ直し、社員とよく話したい」などの感想が寄せられました。

また、農業・食品業者の販路開拓・輸出支援のため、ビジネスマッチングも同時開催しました。

一月二五日、於：成田市、参加者：公庫お客さまなど一〇三人

(千葉支店)



熱気あふれる講演に参加者は聞き入っていました

交流会 林業の専門家が語る
里山や木材利用の可能性

近畿の林業関係者の交流を目的とした「公庫林業資金友の会」を開催。京都府立林業大学の只木良也校長が「里山機能の重要性」、法政大学デザイン工学部の網野禎昭教授が「ヨーロッパの建築にみる今後の木材利用の可能性」というテーマでそれぞれ講演しました。

参加者からは「里山の重要性に改めて気付いた」「今後の木材利用の新しい可能性を知ることができた」との感想が寄せられました。

一月二六日、於：京都市、参加者：近畿二府四県の林業関係者三人、林野庁近畿中国森林管理局など

(近畿地区総括課)



映像を多用した講演が好評でした

アドバイザー 異業種からの農業参入を
実例から学ぶ

富山県農業経営アドバイザー連絡協議会のアドバイザーミーティングにおいて、都市整備事業から野菜の水耕栽培に参入した北陸機材株式会社の川本元裕氏が、「異業種からの農業参入」をテーマに講演。植物工場を設立した経緯と今後の課題や展望など、自社の事業を紹介しました。

参加者からは「経営の多角化をめざす農業参入の成功事例として参考になった」などの感想が寄せられました。

一月二八日、於：富山市、参加者：県内の農業経営アドバイザーなど二五人

(富山支店)



植物工場の映像を興味深く見る参加者

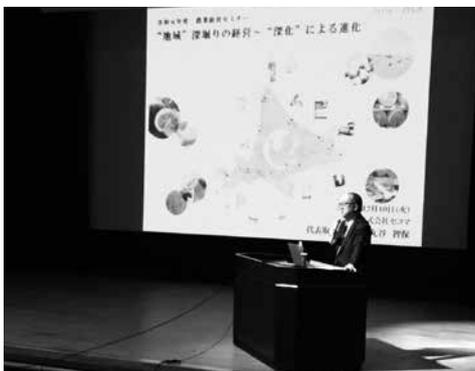
セミナー 雇用問題や地域課題に
農業経営が貢献できること

「オホーツク農業経営セミナー」に、株式会社マイナビの池本博則氏と株式会社セコマの丸谷智保氏が登壇。池本氏は昨今の若者の職場選びの傾向とともに、自社の経営の特徴を雇用につなげるコツを、丸谷氏は過疎化や食品ロスなど地域課題を考える経営がブランド力形成につながることを語りました。

セミナー後「若者の本音が興味深かった」「地域が持つものを見つめ直し、独自の町おこしをしたい」などの意見が寄せられました。

一月一〇日、於：北見市、参加者：農業経営者など八〇人

(北見支店)



地域密着の経営を語る丸谷氏

認定農業者の皆さまへ

自主性と創意工夫を活かした 経営改善を応援します

経営改善に取り組む認定農業者の皆さまのさまざまなニーズにお応えします。

■スーパーL資金（農業経営基盤強化資金）

ご利用いただける方	認定農業者（農業経営改善計画を作成して市町村長の認定を受けた個人・法人） ※なお、個人の場合、簿記記帳を行っていること、または今後簿記記帳を行うことが条件となります。	
資金の使いみち	農業経営改善計画の達成に必要な次の資金 ただし、経営改善資金計画を作成し、市町村を事務局とする特別融資制度推進会議の認定を受けた事業に限ります。	
	農地など	取得のほか、改良・造成も対象となります。
	施設・機械	農産物の処理加工施設、店舗などの流通販売施設も対象となります。
	果樹・家畜など	購入費、新植・改植費用のほか、育成費も対象となります。
	その他の経営費	規模拡大や設備投資などに伴って必要となる原材料費、人件費などが対象となります。
	経営の安定化	負債の整理（制度資金は除く）などが対象となります。
	法人への出資金	個人が法人に参加するために必要な出資金などの支払いが対象となります。
ご融資条件	融 資 限 度 額	【個人】 3億円（特認6億円） 【法人】 10億円（特認20億円【一定の場合30億円】）
	ご 返 済 期	25年以内（うち据置期間10年以内）
	利 率（年）	期間により異なる利率が適用されます。詳しくはお問い合わせください。
	担 保 ・ 保 証 人	ご相談の上、決めさせていただきます。
ご留意いただきたい事項	1. 審査の結果により、ご希望に沿えない場合がございます。 2. 上記以外にも資金をご利用いただくための要件などがございます。 詳しくは、事業資金相談ダイヤル(0120-154-505)または最寄りの日本政策金融公庫支店（農林水産事業）までお問い合わせください。	

国産にこだわり
農と食を
つなぎます。

第15回 アグリフードEXPO東京 2020

プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時

11月5^木日/6^金日
10:00~17:00 10:00~16:00

主催

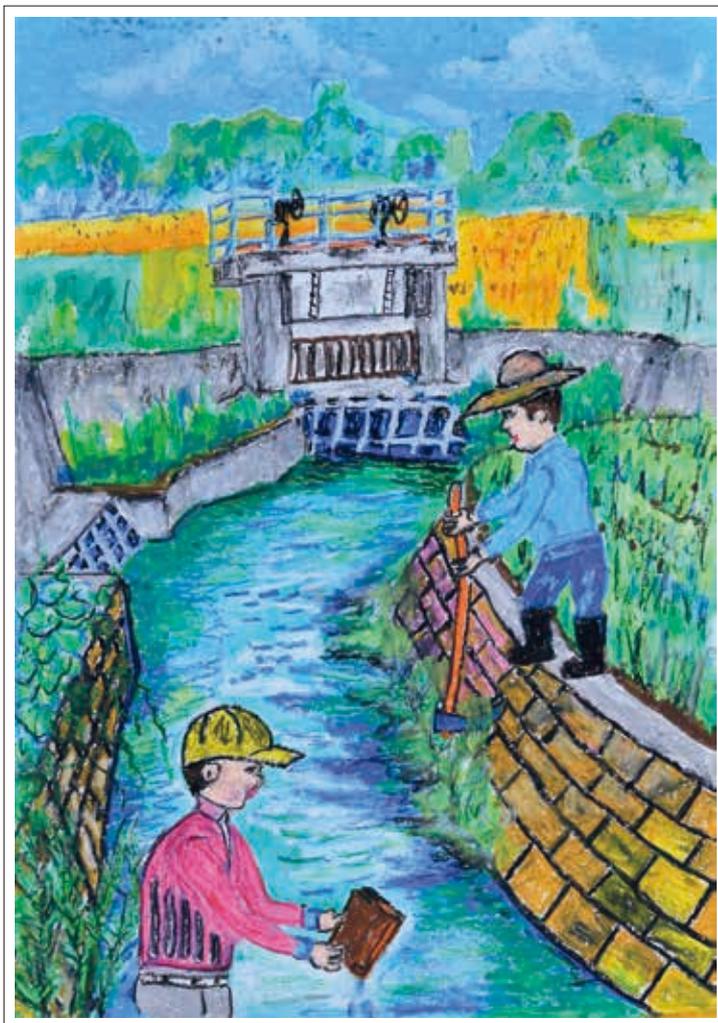
日本政策金融公庫

会場

東京ビッグサイト 西2ホール



酪農経営最前線：NOW



『大切な水路』 嶋村 美月 埼玉県行田市立太田西小学校

■ AFCフォーラム 令和2年3月1日発行(毎月1日発行)第67巻12号(835号)
 ■ 発行／(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
 ■ 販売／株式会社日本食糧新聞社 〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4 47原ビル Tel.03(3537)1311 ■ 定価514円

【本誌価格468円】

